エディット・シュタインとフッサール『イデーン II』

「動機づけ（Movation）」をめぐる両者の一致と対立

植村玄輝（岡山大学）

エディット・シュタイン（Edith Stein, 1891–1942）とフッサールの関係は複雑である。シュタイン自身の回想によれば、シュタインは1916年に自らフッサールの助手になることを申し出て、これをフッサールが受け入れたことにより、二人の共同作業が始まった（ESGA1, 340）。しかし、シュタインにとってこの共同作業は不本意な結果に終わった。このことは、シュタイン助手の職を辞する際にインガルデン宛の書簡で語ったとおりである（ESGA3, 72–73）。また、その後にシュタインが試みた教授資格申請論文の提出も、フッサールの非協力的な振る舞いによって頓挫したことが知られている（ただし、フッサールのこうした振る舞いの背景には、当時高まっていたユダヤ人への反感に対するフッサールの懸念もあったと指摘されている［Varga 2016］）。

こうした経緯もあり、シュタインがフッサールの助手時代にどのような貢献をしたのかは、十分には解明されていない。もちろん、この時期のシュタインの功績について、私たちはすでにいくつかのことを知っている。たとえば、ハイデガーを編者として1928年に出版されたフッサールの『内的時間意識の現象学講義』の実質的な編者がシュタインであったことは、インガルデンの手記（Ingarden 1962）やベームによる同書全集版の編者序論（Hua X, XIX）によって明かされて以来、大部分の研究者に共有されて久しい見解である。しかしながら、同じくシュタインがその草稿を編集していた『イデーン II』に関しては、シュタインの貢献について研究者のあいだで合意が得られているとはいいがたい。たとえばSawicki 1997によれば、シュタインによる『イデーン II』の編集には現象学への独自の貢献が含まれており、シュタインは同書の著者としてクレジットされるべきだという。こうした評価に対して、榊原 2010 は、Sawiki の解釈の不十分さを指摘したうえで、『イデーン II』に対するシュタインの貢献の評価には慎重になるべきだと説く。だが、それ自体としてはもっともなこの提案を榊原がシュタイン自身の著作を参照せずに行っていることは、ここで指摘されるべきだろう。この問題に関して、より包括的な研究が求められている。

本発表の目的は、以上の事情を踏まえ、シュタインとフッサール『イデーン II』の関係について、関連テクストのより詳細な分析を通じて明らかにすることである。具体的には、関連する様々なトピックのうち、「動機づけ（Motivation）」に話題を限定し、シュタインの教授資格申請論文になるはずだった著作『精神科学と心理学の基礎づけへの寄与』（ESGA5、原著 1922 年、以下『基礎』）、フッサールがシュタインに託した『イデーン II』原草稿（Hua IV/V として刊行予定）、それらを編集することで生まれたシュタイン版『イデーン II』の手稿（Ms. M III 1 I 1）、および1952年に刊行された刊行版『イデーン II』（Hua IV）を主要な典拠として、また後三者に関する計量的な研究（Caminada 2024）の成果も踏まえながら、以下の四点を示す。

1. 少なくとも動機づけが問題になる範囲では、シュタインは『イデーン II』の原草稿に見られるフッサールの見解をゆがめることなく整理して同書の手稿を作成した。
2. その一方で、シュタインが『寄与』で行った動機づけに関する議論は、フッサールの動機づけ論を部分的に洗練・発展させたものであり、また、部分的に拒否するものでもある。
3. 以上の点に鑑みて、シュタインはフッサールに委託された編集作業を、自分自身の見解を忍び込ませることなく、高度な水準で行ったと評価できる。
4. こうした評価は、シュタインが動機づけの現象学に対して独自の貢献を行ったことを除外しないしないどころか、そのような貢献を認めるための根拠にもなりうる。

本発表は二部構成で行われる。前半部では、『イデーン II』の成立事情や関連する一次文献を概観した上で、上記の主張のうち、1の証拠をいくつか呈示し、1にもとづいて3および4を主張するためには 2 が示されなければならないことを確認する。続く後半部では、シュタインの『寄与』を三つのヴァージョンの『イデーン II』と照らし合わせることで、2 を示す（このパートは Uemura & Salice 2019 および Uemura forthcoming に依拠したものになる）。

文献（本要旨で言及したものに限る）

Caminada, E., 2024. Old New, Ideas Two. A First Stylometric Exploration. Unpublished.

Sawicki, M., 1997. *Body, Text, and Science: The Literacy of Investigative Practices and the Phenomenology of Edith Stein*, Kluwer

Stein, E., 2000–2020. *Edith Stein Gesamtausgabe*. Herder.（ESGA と略記し、アラビア数字で巻数を示す）

Husserl, E., 1950ff. *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*. Nijhoff/Kluwer/Springer.（Hua と略記し、ローマ数字で巻数を示す）

Ingarden, R., 1962. Edith Stein on Her Activity as an Assistant of Edmund Husserl. *Philosophy and Phenomenological Research* 23/2, pp. 155–175.

Uemura, G., forthcoming. Edith Stein on Motivation and its Limits. In: C. Hadjioannou & N. Soueltzis (ed.), *Motivation and Time*, Routledge.

Uemura, G. & Salice, A., 2019. Motives in Experience. Pfänder, Geiger, and Stein. In: A. Cimino & C. Leijenhorst (eds.), *Phenomenology of Experience. New Perspectives*, Brill, pp. 129–149.

Varga, P. A., 2016. Edith Stein als Assistentin von Edmund Husserl: Versuch einer Bilanz im Spiegel von Husserls Verhältnis zu seinen Assistenten; mit einem unveröffentlichten Brief Edmund Husserls über Edith Stein im Anhang. In: A. Speer & S. Regh (eds.) *„Alles Wesentliche lässt sich nicht schreiben“: Leben und Denken Edith Steins im Spiegel ihres Gesamtwerks*. Herder, pp.111–133.

榊原哲也 2010.『フッサール現象学の生成──方法の成立と展開』、東京大学出版会。